

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成23年度派遣報告書

—ケニア・ナイロビ大学、スワヒリ語、H23. 8. 10-H24. 1. 31—

平成23年入学

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

博士課程1年生

山森小夜

自身の研究テーマについて

私の研究テーマは、タンザニアにおける学校の自助努力活動である。1990年に世界銀行が開催したタイのジョムティエンでの会議では「万人のための教育 Education For All」という目標が掲げられ、2000年にはセネガルのダカールで「世界教育フォーラム」が開催され、2015年までに世界中の人々に教育を整え、識字環境を整備しようという目標が掲げられた。アフリカ諸国とその援助国・機関は、ともにこの目標達成を目指して教育開発のための長期計画を策定するようになった。その流れに沿う形で、タンザニアでも教育政策として初等学校、中等学校の増設を行ってきた。特にこの10年で変化が大きいのは、中等学校の数である。2001年に937校だったものが、2011年には4367校と4倍を超える。中等学校を増設はしたものの、中央政府の教育予算は十分ではなく、地域社会や学校は、政府の予算や、援助団体の支援が入るのを待つのみでなく、自力更生・自助努力を求められている。

このような自助努力活動自体は2000年代に新たに始められたものではなく、1967年の「自立のための教育」政策によってタンザニアでは既に展開されていた。当時「自立のための教育」は農村重視の開発理念を反映していたため、その政策下で実行される自助努力活動は、実際には農場経営という画一的な形で行われた。しかし、地域の環境要因やマネジメントの失敗によって、農場経営に特徴づけられる自助努力活動の実施は各地で明暗が分かれていった。農場経営が衰退した地域では、その後、各学校が置かれた自然環境や社会経済状況に合った形で、農場経営以外の自助努力活動への転換が見られるようになった。こうした地域の実情に合わせた「自主的な」自助努力活動の展開は、中等学校の持続的な運営を模索する一つの方途であると考えられる。以上のような背景を踏まえて、本研究では1) 調査地の中等学校の自助努力活動の歴史の変遷を追うこと、2) 現在の自助努力活動がどのように展開されているのか、その実態を把握すること、3) 地域の「自主的な」自助努力活動は、今後の学校の持続的運営にどのように寄与できるか、その可能性を検討することを目的とする。

研修言語の概要

スワヒリ語は、主に東アフリカ海岸地帯を中心に使用されている。タンザニア、ケニア、ウガンダで公用語として使われ、コンゴ民主共和国、ルワンダ、ブルンジなどの一部でも話されている。このような地域で、スワヒリ語はリンガ・フランカ（地域共通語）として大きな役割を果たしている。バンツー諸語の中で最大の勢力を誇る言語である。数世紀にわたるアラブ系商人とバントゥー系諸民族の交易の中で、現地のバントゥー諸語にアラビア語の影響が加わって形成された言語であり、語彙の約 35%はアラビア語に由来する。また、ペルシャ語、ドイツ語、ポルトガル語、英語、インドの諸言語からの借用語も見られる。

語学研修の内容について

語学研修はアングリカン・チャーチ・ランゲージ・センターという語学学校で行われた。この語学学校にはスワヒリ語の講師が 3 人おり、カンバ語とスワヒリ語を教える男性講師が私の授業を担当した。本プログラムにより研修を受ける前に、京都大学の講義でスワヒリ語を履修し、事前に入門的な基本文法を学んでいった。渡航してから 10 日間は辞書やテキストなどの選定を行い、約 1 ヶ月半はタンザニアで予備調査を兼ね、臨地で実際にスワヒリ語での会話や生活を試みた。ケニアに戻ってから本格的にスワヒリ語の講義がはじまり、授業は平日の 5 日間 3 時間から 4 時間行われた。基本は 90 分一コマで、途中 30 分の休憩をはさみ、一日 2 コマの授業が行われる。講師や自分自身が、理解度などの点で必要と判断した場合、随時補講を追加した。基本講義は文法や作文などを中心に進められるが、毎週金曜日は主に会話練習に重点を置き、自分の研究トピックやお互いの国の文化について話した。わからない単語は英語で伝え、それに対応するスワヒリ語を教えてもらうといった具合に進んだ。

この語学学校の授業方法には、グループレッスンと個人レッスンがある。今回私は個人レッスンを選択したが、私は以前から少しスワヒリ語を勉強していたので、今回は自分のスワヒリ語の知識の補てんとブラッシュアップを目標とした。その点で、個人レッスンは理解度に合わせて進めていけたので、京都大学の語学講義で既に勉強したトピックについては早めに進めることができた。入門的な文法知識を持ち合わせていたが、一通り重ねて学習していった。自分の学んだことの復習にもなり、知らなかった知識が追加され、事前に学んでいったことは更に定着した。講師が教えている別の学習者が半年以上かけて学んでいるところ、約 60 日という短期間で基本的な文法事項を終え、最後の 1 カ月は読解演習に入った。最も自分の語学力が伸びたと感じたのはこの時期であった。

現地で発行されているスワヒリ語の新聞の教育に関する記事と、タンザニアでの臨地演習の際に収集したスワヒリ語の文献を教材に、予習でわからない単語を辞書で引き、文章全体の構造や内容を講師に解説してもらった。自分の研究トピックに関する専門用語の収集にも大きく役立ち、また語学と同時に自分の研究に役立つ情報を知ることができるので

モチベーションが上がった。

ケニアに来たばかりのときには記号の羅列でしかなかった長文が理解できるようになり、最終的にタンザニアの教育省のホームページに載っている政策文書や政治家のスピーチなど、辞書を用いれば読めるようになったことは、自分の研究の可能性を広げた。



研修期間中に印象に残った体験や経験

私を教えてくれていた講師は、とてもおしゃべりが大好きな人であった。難しい文法事項を勉強している時に、頻繁に息抜きの会話を挟んだものだった。

昨日食べたものや出かけたところ、友達の様子などについて簡単な会話をするのだが、話がよく盛り上がった。次第に会話は複雑になっていき、お互いの国の社会問題や文化についても話しあうようになった。この時は充実したひと時だった。自分の持っているスワヒリ語のボキャブラリーで出来る限り表現を試み、わからない表現については英語で「これはスワヒリ語でなんて言うの？」と尋ねた。

講師でもなかなか英語で表現しがたい単語にぶつかる時もある。一つの英単語ではニュアンスを表しきれず、複数の単語の意味を併せ持つ単語である。そんな時は講師と私で様々な使用例を作り提示し合い、その単語が持つ要素を一つ一つ確認していきニュアンスを掴んだ。それはまるでなぞなぞを解いているかのような感覚だった。

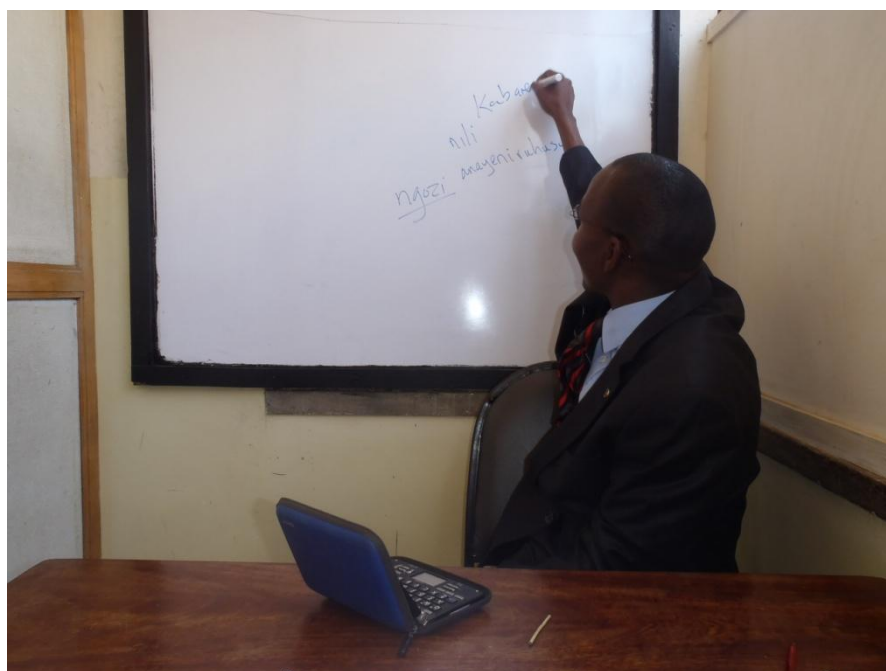
何気ない雑談のような時間ではあったが、お互いの文化についてもよく知りあうことができ、自分の国のことを説明する力がつき、語彙を覚えた。

目標の達成度や反省点について

基本的な生活に必要な、簡単な会話、買い物や交渉程度の会話の能力ならば既に身に付けていたが、今回は調査に必要なレベル、政策文書やスワヒリ語の文献を読む能力を習得し、スワヒリ語でのインタビューに支障がない程度の語学力を獲得することを目標とした。

文法を一通り学んだあとに、実際に研究に関連する文献や新聞、教育省の政策文書などの読解を行ったことで、自分のスワヒリ語能力は飛躍的に向上したと自負している。個人授業で理解に合わせて進めることができ、わからない部分はしつこく講師に食いついて聞くことができたので、6カ月に満たない短期間ではあったが、通常よりも効果的な学習ができた。

ただ一つ残念だったことが、講義は全て英語を介して行われたので、自分の英語の語学力の不足がスワヒリ語の習得の妨げになってしまったことだ。授業中に出てくる意味のわからない単語については電子辞書で引いたり、質問することで講師が噛み砕いて説明してくれたりしたが、概念やニュアンスを講師に確認する際、自分のわからないことや疑問に思っていることを英語でうまく表現できず、何度ももどかしい思いをした。幸い講師が根気強く理解に至るまで説明を繰り返したり、例文を重ねて提示してくれたりしたので大分助けられた。当たり前のことだが日常生活の会話においても、私がスワヒリ語で理解できないものを相手は英語で説明する。スワヒリ語の習得と英語の能力は密接にかかわっているため、日本に帰国後もスワヒリ語のブラッシュアップのみならず、英語も同時に鍛錬を続ける必要があると感じた。



黒板に板書する講師



休憩のティータイムにスワヒリ語の講師たちと